

となみ芸術文化友の会

# 友の会だより 号外

二〇一六年八月

発行 となみ芸術文化友の会事務局（砺波市美術館内）

〒九三九一-三八三 富山県砺波市高道一四五一

電話〇七六三-二三一-一〇〇一

となみ芸術文化友の会理事の川端芳彦さんより、今回の研修旅行によせて二題を寄稿頂きましたので、ご紹介します。



黄驀山萬福寺

## 普茶料理と天ぷら 川端 芳彦

今年の秋の研修旅行では、京都に行きますね。宇治の萬福寺で普茶料理を味わうことになっています。普茶料理とは煎茶道の会席料理のことです。萬福寺は煎茶の総本山。中国明末期、日

本では江戸初期に伝来した伝統仏教の中では一番新しい宗派です。高岡瑞龍寺も当初はこの黄檗宗の影響を大きく受けていたようです。そして現在私たちが普通に思っているもので、このとき伝来したものが煎茶です。煎茶とは菓罐で茶葉を煮出すものですが、このころ中国から伝わったのが、急須を使う方法のようです。

急須に二種類あるのはご存じだと思いますが、いわゆる中国式のポット型のもは本来マイ急須として直接口をつけて飲んでいたそうです。隠元禪師遺愛の品として伝わる急須の注ぎ口がそこだけ白くきれいな色だったのを展覧会で見たことがあります。行儀が良いとかが悪いとかというのは国によって違うものだとつくづく思いました。



普茶料理の配膳 普茶料理抄(1772)より

さて普茶料理についてですが、言ってしまうと、天ぷらのフルコースです。仏教料理ですから基本的には精進です。筆者が珍しいと思ったのは、梅ぼしの天ぷらでした。何十年前前のことなのであまりはつきり記憶していませんが、あまり酸っぱくなかったような気がします。

天ぷらというと日本を代表する料理ですが、本来は中国料理からのものなのです。では天ぷらという名前は何なのでしょう。飲食事典(平凡社版)によりますと、ポルトガル語で寺を意味するテンプロから来ているようです。日本にキリスト教を伝えたポルトガル人宣教師がテンプロと呼ぶ建物を建て、人集めのために魚のすり身あげをふるまっていたようです。すり身を焼くか、蒸すかしたかまぼこしか知らなかった当時の日本人にとってはカルチャーショックだったでしょうね。それがいつしかテンプラと転化していったもののようなのです。それが江戸前では、すり身ではなく、切り身をそのまま揚げて食べることになり、天つゆにつけて食べる上品な日本料理になったという事です。天つゆはおそらく近代になってからではないかと筆者は思います。江戸の天ぷらはそもそも露天売りのファストフードですから、味は塩し

かないでしょう。案外、天つゆは関西風なのかもしれませんね。近年、塩で食べさせる天ぷらも高級店ぶりたそうな店ではやっているように思います。最後に天麩羅という用字ですが、これは感動しました。江戸人の洒落ですね。麩は小麦からできています。羅はまわりを包む。天は上にあるからあげる。「天三麩羅」と漢文的にも文句のつけようがない名前になっています。誰が考えたんでしょうね。



江戸時代の天ぷら屋台 近世職人尽絵巻 飯形蕙齋 東京国立博物館蔵

### ※編集付記

普茶料理は、江戸時代初期に中国から日本へもたらされた精進料理。葛と植物油を多く使った濃厚な味、卓を囲み大皿に乗った料理を各人が取り分けるのが特徴である。代表的な普茶料理に胡麻豆腐がある。

## 若冲の鶏

川端 芳彦

伊能忠敬という人と伊藤若冲は、似ているとも思います。二人とも四十歳を過ぎてから偉業を成した人という意味です。平均寿命などという考えもなかった時代。人間の意思の力とはすごいものだと思います。忸怩たる思いになる自分がまた情けない。



動植綵絵より紫陽花及鶏図(部分) 伊藤若冲(1759)  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

若冲という鶏が有名でした。しかし、どうしてそれほど有名なのかよく分かりません。鶏だけが特別に優れているというわけではなく、画題も多く、すべてが素晴らしいと思えるのですが、でも日本画家の間では鶏を描いて若冲

を越えられないと思われているようです。齋藤清策先生が日展に鶏の絵を初めて出品したとき、話題になったそうです。当の先生は若冲という存在をそれまで知らなかったとおっしゃっているのがまた筆者には驚きでした。先生は、えらいことやってしまったと後悔したそうですが、後には引けないのでがんばって連作として創作したそうです。それで特選二回受賞につながったのですからすごい話ですね。



群 齋藤清策(1992) 松村外次郎記念庄川美術館蔵

清原先生も鶏で有名になった方でした。洋画で鶏を画題とした初めての方だったのではないのでしょうか。清原先生が若冲を意識していたかどうかは知りませんが、齋藤先生同様に画題と格闘されたことは間違いないと思います。勇ましい軍鶏の時代を過ぎて、花と鳥という画題に変わっていったこと

に、先生自身の心の余裕のようなものを感じ取るのはおこがましいでしょうか。



紅葉遊鶏図 清原啓一(2005) 砺波市美術館蔵

余談ばかりになりましたが、今回の若冲で楽しみなのは、モザイク画のような動物画です。六曲二隻の大画面に何であのような不思議な画法を使用したのか。その不思議さを体感できるかどうか、それが最も楽しみです。京都展に展示されているかどうかは分かりませんが、京都に縁深いので、おそらく展示されていると思われるのが、代表作の「動植綵絵」です。この完成に生涯をかけたと言っても過言ではない細密画です。若冲はこの連作を相国寺に奉納しました。それが美術好きの明治天皇に献上を命ぜられ、宮内庁三の丸尚蔵館に現在あるわけです。と言うと明治天皇のわがままのように思われる

かもしれませんが、ちゃんと多額の下賜金を相国寺がもらい、排仏の大変な時代を乗り越えられたという面もあるようです。そして、筆者が最も好きなのは墨絵です。時に大胆な筆致でユーモラスな面もある墨絵は普段着の生の若冲の姿に思えます。慈愛に満ちた方だったのではないのでしょうか。

## 編集後記

今回の研修旅行では、大山崎山荘美術館・開館二〇周年記念展「うつくしいくらし、あたらしい響き クロード・モネ」も見学します。大山崎山荘は、関西の実業家・加賀正太郎の別荘として、大正から昭和にかけて建設された建物です。加賀氏は、証券業をはじめ多方面で活躍した実業家である一方、大山崎山荘で洋蘭の栽培を手がけ、植物図譜「蘭花譜」を刊行するなど、趣味人としても大きな業績を遺しました。この大山崎山荘に、建築家・安藤忠雄が手がけた現代建築を加えて、一九九六年に開館した美術館です。クロード・モネの作品展示はもちろん、国指定登録文化財である大山崎山荘を直に感じることでできる貴重な機会になると思います。皆様のご参加をお待ちしております。